

「命を失う者は命を得る」

詩篇
マタイによる福音書

第103篇 14節～19節
第10章 34節～42節

説教 岡村 恒牧師

「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう」(37節)

今日お読みしたところを読むと、主イエス・キリストはとても衝撃的な言い方をなさっています。「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。」(34節)

主イエス・キリストのことを、支配され抑圧されている神の民を解放する救い主だと思った人々と同じ思い違いを、しばしば私たちもします。私に平安を与えて下さる、病や問題、対立などを解決してくれる救い主だと期待してしまうのです。主イエス・キリストは「わたしはきた」と連呼され、その目的を明確に語られました。私は剣をもたらすために来た、と言われるのです。「わたしがきた」のは、ただひたすら主イエス・キリストを愛して生きる決断を迫るためだ、というのです。

この当ても、今日でも、異教社会でキリスト教信仰を持って生きるためには、はっきりとした決断が求められます。主イエス・キリストに出会っていただいていたがゆえに、家族とうまくいかなくなる…そういう出来事が今日も世界中で、私たちの身近で起こっています。

主イエスがお求めになるものはただ一つです。主イエス・キリストを他の何ものより愛すること。しかし人間の側からはこれは不可能なことです。一心不乱に主イエス・キリストを愛することは、私たちの側からは起こりません。主イエス・キリストは私たちに不可能な道を示して、それができなければ神様は愛して下さらないと宣告なさっているのでしょうか？

「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得る」(39節)。主イエスはこの不思議な言葉に続いて、「受け入れる」、「受け入れない」という言葉を連呼されました。この言葉を聞くと、〈あなたは何者か？〉と、繰り返し問われている思いがします。主イエス・キリストの言葉は、私たち一人一人と主イエス・キリストとの関係

を問い、明らかにするからです。私たちの信仰がここで問われています。主イエス・キリストを救い主として信じて、受け入れて生きているのかどうか、ここで問われるのです。

『神とは、主イエス・キリストとはこういうお方だ。』こう語るのが〈証し〉です。その証しを聞いて、聖書の語りかけを受け入れる。そういう仕方では人は、主イエス・キリストを、神を受け入れず。39節や42節の言葉を、聖書が最初に記された元の言葉で見ると、《自分の命を失う者は、…決してその報いを失うことはない》と記されています。主イエス・キリストが来られたのは、私たちの期待に答えて私たちを満足させるためではありません。神ご自身の救いの計画を実現させるためです。神を信じ、主イエス・キリストを信じる者に、確かな報い、永遠の命を与えるためです。

自分の命を失うということは、自分自身に対して「No!(否)」とすることでしょう。自分の力や可能性に頼って生きることを捨てて、神の救いの計画の中で生きようになることでしょう。クリスチャンという言葉は《キリストのもの》という言葉で、元々はあざけりの言葉でした。しかし代々のクリスチャンは、誇りを持ってそう呼ばれました。「あなたは私のものだ」と主イエス・キリストが宣言して下さったことを喜び、感謝し、誇りにしたからです。

主イエス・キリストは、《わたしがきたのは、あなたに命を与えるためだ》と、今日も宣言して下さいます。この呼びかけを聞いて、自分の命を手放したものは、本当の命を生きようになります。具体的には、証し人として生きようになります。祈りをもって歩むとき、一人一人が証し人として用いられます。一瞬たりとも外れることなく、永遠にキリストのものです。

《あなたは私のものだ》という主イエスの言葉を聞き続けて、多くの信仰者たちが激しい戦いの中を、孤独な祈りの生活を、証し人として用いられて生きてきました。私たちもまた、一日一日、その宣言を聞きながら歩ませていただきたいと願います。

(記 説教要約奉仕者)